

プレスリリース【新刊刊行】  
報道関係者各位

2011年3月31日発信

## 『低線量内部被曝の脅威』刊行

約半世紀、全米約1300の核施設隣接自治体公式資料に基づく被曝影響の実践的研究環境／社会問題を専門とする出版社・(株)緑風出版(りよくふう・しゅっぱん、代表=高須次郎)では、3月30日、50年代以降のアメリカの核施設隣接自治体1300余の公式資料に基づいて癌リスクを徹底検証した『低線量内部被曝の脅威——原子炉周辺の健康被害と疫学的立証の記録』を刊行しました。

本書はアメリカ合衆国の核施設がもたらす健康被害について、大気圏核実験時代(1945年～63年)に続く核被害を参照としながら、徹底した疫学調査をもとに、簡明な図表と明快な論調で解説する。

とりわけ、アメリカ全土3,053の郡における人口および死亡数を追跡し、年齢グループを18に分けた上でのグループ別年齢調整死亡率を5年を1期間とした3期間を通じて割り出すという、膨大な基礎作業を通じて、核施設周辺での癌死亡率を分析していく姿勢は圧巻である。

また大気圏核実験、チェルノブイリ核事故が、地球規模で影響を与えていったことについて、様々な統計データをもとに実証。放射能汚染が地球全体の問題となることについて象徴的に示し、高リスク地域から低リスク地域への移住が問題の解決にはならないことを指摘する。

レイチェル・カーソンの予見を裏付けた、手ごたえのある警世の書。

[書誌データ]

『低線量内部被曝の脅威——原子炉周辺の健康被害と疫学的立証の記録』

ISBN978-4-8461-1105-2 C0036 四六判上製 388頁 本体価格5200円

[著者] ジェイ・マーティン・ゲールド (Jay Martin Gould) 1915～2005年。統計学・疫学者。コロンビア大学で博士号。1955年、最高裁判決にまで発展したブラウンシュー事件の専門家証人として活躍し、統計学者としての地位を描く確立。その後環境保護庁の科学諮問委員となる。85年に「放射能と公衆衛生プロジェクト」を設立、原子炉からの放射線物質と健康被害に関する疫学調査に尽力。

[共訳者]

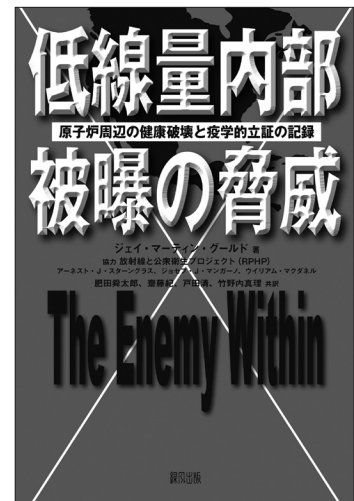
肥田舜太郎(ひだしゅんたろう) 1917年生。日本大学専門部医学科、医師。全日本民医連顧問。

斎藤紀(さいとう おさむ) 1947年生。福島県立医科大学卒、広島大学原爆放射能医学研究所内科。

戸田清(とだ きよし) 1956年生。長崎大学環境科学部教授(環境社会学)。

竹野内真理(たけのうち まり) 1967年生。東京学芸大学教育学部英語科卒。通訳者。

(株)緑風出版(りよくふう・しゅっぱん)は1982年の創立の専門書出版社(本社・東京都文京区本郷)。エコロジー・環境問題から内外政治・社会問題まで、現代と未来をみすえた書籍を刊行。2003年、優秀な出版活動に対し唯一贈られる第18回梓会出版文化賞を受賞。刊行図書に『ドキュメント日本の公害』、プロブレムQ&Aシリーズ等がある。



本プレスリリースに関するお問い合わせは、(株)緑風出版・営業部まで

TEL 03-3812-9420 E-mail: info@ryokufu.com